『新しい学校』一九五三年七月（興文館）

■教育時評

# 文教施策の一貫性

第五次吉田内閣が出現して、大達文相という予想外の人事に人々は意外の感にうたれた。文部省の一高官は、この人事が発表されたとき、今度の文相は内務官僚の出身だから、岡野さんのように無茶はやらないだろうと、ホッとした口吻だったそうである。果して立ち上り仲々慎重で、義務教育学校職員法についてもよく検討したうえでと答えているし、また前文相は修身、地理、歴史の復活論らしいものを議会でブッて、大向うの人をほくそ笑ませたり、憤慨させたりしたが、その点も大達文相はまず研究という態度である。尤もこれは或る意味では前文相と丁度反対に人々を喜ばせたり、憤慨させていることになるかも知れないが、併し今の所どうともはっきりしたわけでないから文句のつけようもないし、当分見送りといった形である。教育というものは、成果が十年百年後にあらわれるものであるから、慎重に行くべきだという考え方もわれわれとしては賛成である。どうかそのようにやっていただきたいと思うのであるが、それは併し何にもしないということでなかろうから、場合によっては一部の反対を押し切ってはっきりした態度で押してもらわなければならぬ場合もあろう。

そこで、どうにも不思議でならないことは、つい一カ月の間に、こうも文致施策の根本方針がグラツクことである。尤もその間に内閣がかわり、選挙があったからかも知れないが、百年の大計と言われることが、こうも簡単に――誠に全く簡単にとしか見えないのだが――ひっくりかえることである。勿論今の所まだはっきりしたわけでないから、そういうのは言いすぎかも知れないが、それにしてもあれだけ立派な教育振興の名義で法案となったものが、トタンに影がうすくなるというのはどういうことだろうか。われわれはそこに何か割り切れぬものを感ずるのである。

一体何が根拠となって、文教施策の方針がきまるのだろうか。どうも個人的な趣味なのか、政党の利害打算なのか、われわれにはよくわからないのである。多くの人々はそういう事がよくわかっていて、あれは日教組対策だとが、あれは何の線だとかということを言うらしいが、私にはどうもふにおちない。いやしくも一国の文教をきめるのにそういった個人的趣味や、政党の利害関係で事がきめられているとは思えないし、また大臣諸公といえどもそこまで堕落はしないと思うのである。といって、自由党が文教施策の拠り所となるものをもっている、或は現在の日本の教育の実態と問題点をはっきりつかんでいることを聞いたこともないし、見たこともないのである。

義務教育学校職員法では、文部省の局課長連中も皆反対で、宮仕えの悲哀をかこっていたというから、あれに関する限り、文部省の官僚の案でもなさそうである。文部官僚が文教施策を私するようなことは勿論よくないことであるから、その点からみれば、これは確かに官僚的文教施策を改善していることなのであろう。大変結構なことだと思うのだが、それにかわって出て来たのが、政党の利害関係的文教施策であったり、個人の趣味的文教施策であったりしてはまた困ると思うのである。

われわれは大達文相の百年の大計から割

り出した文教施策を望むものであるが、そういう文教施策というのは、もうただひたすら大達文相一人の力にまたねばならぬほどはかないものであろうか。また百年の大計がそう簡単に、方面ちがいの人が勉強した位で出るものだろうか。われわれは文相にいろいろのことを望むことは出来る、また文相がそれにこたえてくれることを願うけれども、そういうことがそもそも、近代国家の文教施策について甘い考え方なのでなかろうか。

　少くとも現代の文教の実態と問題を明らかにするには、それだけの根本的な組織体制が必要なのであって、そういう組織がおかれて、調査や研究がなされて、その上に大臣諸公の個性ある文教施策も出て来るのであるまいか。そういう現実をおさえるものが、現在、日本にはどこにもないのである。そういうと人は大学はどうか、文部省の調査普及局はどうか、研究所はどうかというが、そういう任にたえる程になっているものは一つもないのである、皆中途半端なものである。そこに妙な感情や利害に基いて文教施策が行われるすきがあるのである。少し大げさだが、このままで行けば植民地的文教施策が出て来ないでもないのである。過去の文教政策が軍国主義になったり、外国一辺倒になったりしたことを反省してみたらいいのである。文教施策はもはや科学的地盤をぬきにしては成立たないのである。

（矢口　新）